

幼児期の運動発達における身体知の発生に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, みづき メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/428

2-P-9

幼児期の運動発達における身体知の発生に関する研究

近藤みづき

動く感じが分かる能力とは動感身体知とよばれ、自然科学的な知ではなく、自転車に乗れる、楽器が弾ける等の新しい運動ができる、できないに直接かかわる身体能力としての知と定義されている。動感身体知の研究は見られるが、幼児を対象にした研究は十分進んでいるとはいえない。

そこで本研究は、スポーツ運動学の立場から、幼児が自分自身の動く感じが分かる能力をどのように発生させるかを質的に明らかにし、幼児期に効果的な運動指導のための基礎的資料を得ることを目的に実施した。

神戸市内のA幼稚園の3歳児（年少児）、13名（男児6名・女児7名）を対象に、観察実験を行った。運動課題は「平均台から落ちないように歩く」という歩行運動である。研究協力者の2回目の動きかたを対象に、スポーツ運動学の専門家と一緒に園児の体感身体知の発生について分析した。その結果、いくつかの特徴的な動きかたの事例が出現した。動きかたを個別に分析すると、課題の達成の違いが見られた。これらは動感身体知の違いによるものと考えられる。本フォーラムでは、金子が提唱した動感身体知カテゴリーの始原身体知、なかでも体感身体知の働きに着目し、動感化現象として表れている事例を発表する。

2-P-10

家族性多発性 GIST モデルマウスの GIST からの初代培養系の樹立

佐野太亮

【概要】 *c-kit* 遺伝子に germline の変異を有する家族性多発性 GIST (Gastrointestinal Stromal Tumor) のモデルマウスはこれまでに3種類が作製されているが、それらモデルマウスの GIST からはまだ培養細胞株は樹立されていない。培養細胞株の樹立による *in vitro* の実験とモデルマウスそのものを用いた *in vivo* の実験の併用は、各種薬剤の抗腫瘍効果判定をはじめとする様々な GIST 研究に重要である。

【目的】 本研究では、家族性多発性 GIST のモデルマウス (exon 17 変異を持つタイプ) に発生する盲腸 GIST 組織から、組織片培養法と細胞分散培養法の2つの方法により、マウス GIST の培養細胞株を樹立する。

【方法】 DMEM、 α -MEM、RPMI1640、F12 の4種類の培地を用いて細胞の増殖の違いを検討した。また、細胞分散法では、分散試薬にトリプシン、Accumax、Accutase を使用した。

【結果】 4種類の培地のうち F12 では細胞増殖はほとんどなかった。DMEM、 α -MEM、RPMI1620 の中では、DMEM の発育が最もよく、血清は FBS30%を用いることで、細胞増殖が進んだ。しかし、使用したシャーレ全体にまでは増殖せず、一定の数まで増殖すると増えなくなった。

【結語】 今回の結果から培地の種類、血清の濃度などの大まかな条件は検討されたが、明確な結果は得ることができなかった。